

大項目	Ⅰ 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置								
中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承①博物館の施設設備の整備								
【年度計画】 (4 館共通) 1) 収蔵・展示施設及びこれらに関連する設備に関するメンテナンスサイクルの確立に向けた検討を引き続き行う。 (東京国立博物館) 1) 本館については収蔵・展示施設の改修と拡充に関する基本計画を引き続き策定する。									
担当部課	総務部環境整備課				事業責任者	課長 城山美香			
【実績・成果】 (4 館共通) 1) 収蔵・展示施設及びこれらに関連するメンテナンスサイクルの確立に向け、一部既存建物の調査を実施した。 (東京国立博物館) 1) 本館の収蔵施設の拡充については、管理棟（仮称）建設を着工し、工事を実施している。 2) 本館リニューアル計画について、環境整備委員会の審議を経て新規にワーキンググループを発足し、文化財保護法の一部改正に伴う保存活用計画策定の方針について検討を始めた。									
【補足事項】									
【定量的評価】 項目		30年度実績	目標値	評価	経年 変化	26	27	28	29
-		-	-	-		-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 本館の収蔵庫環境の改善策として着工した管理棟（仮称）新営工事は、30年度末の出来高が60%を超え、工程表のとおり進行している。 管理棟（仮称）竣工後のからし期間後の本館の収蔵品の移転計画についても検討を開始した。 本館保存活用計画策定に向けて30年度は約半数の部屋の調査を行い、報告書をまとめた。						
【中期計画記載事項】 施設設備の点検・診断を実施し、その結果に基づき、収蔵・展示施設の老朽化、耐震対策及びセキュリティの強化に計画的に取り組む。これらの取組を通じて得られた施設の状態や対策履歴等の情報を記録し、次期点検・診断等に活用するという「メンテナンスサイクル」を平成32年度までに構築し、継続的に発展させる。 (東京国立博物館) 開館後約 80 年が経過した本館の空調設備、収蔵・展示施設について、建物が重要文化財に指定されていることに配慮し、2019 年 ICOM 京都大会及び 2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会も視野に入れつつ、改修等計画を推進する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 本館の保存活用計画策定に向けて、調査を依頼するなど、順調に事業を実施できた。 本館及び資料館のセキュリティの強化に際し、カードキー等の現状と更新案について調査し改善準備を進めることができた。						

大項目	Ⅰ 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置							
中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ①博物館の施設設備の整備							
【年度計画】 (4館共通) 1) 収蔵・展示施設及びこれらに関連する設備に関するメンテナンスサイクルの確立に向けた検討を引き続き行う。 (京都国立博物館) 1) 仮設収蔵庫(東収蔵庫)の減築工事を引き続き行う。 2) 明治古都館(本館)の免震補強ほかの改修に向けた準備として、基本計画に基づき準備を進める。								
担当部課	総務課			事業責任者	課長 数馬厚人			
【実績・成果】 (4館共通) 1) 収蔵・展示施設及びこれらに関連する設備に関するメンテナンスサイクルの確立に向け、外壁や防水等建築にかかる劣化損傷調査(予備調査)を行った。 (京都国立博物館) 1) 東収蔵庫改修工事が完了した。 2) 明治古都館免震改修他工事に向けた埋蔵文化財発掘調査を実施し、30年度は建物外周部の調査を行った。								
【補足事項】								
								
東収蔵庫				埋蔵文化財発掘調査				
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
-	-	-	-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価: B		【判定根拠、課題と対応】 東収蔵庫改修工事(減築、内外装改修等工事)を年度計画通り完了した。 本館改修基本計画を基に京都市と協議を行い、調査範囲の指導を受けた発掘調査について、30年度は予定範囲である建物外周部の調査を完了した。						
【中期計画記載事項】 施設設備の点検・診断を実施し、その結果に基づき、収蔵・展示施設の老朽化、耐震対策及びセキュリティの強化に計画的に取り組む。これらの取組を通じて得られた施設の状態や対策履歴等の情報を記録し、次期点検・診断等に活用するという「メンテナンスサイクル」を平成32年度までに構築し、継続的に発展させる。 (京都国立博物館) 京都国立博物館本館(明治古都館)の改修に当たっては、重要文化財に指定された建造物としての保存とともに展示施設としての活用に配慮した改修計画及び観覧環境の再整備計画を進める。								
【中期計画に対する評価】 評価: B		【判定根拠、課題と対応】 32年度構築予定のメンテナンスサイクルについては建築領域に関する予備調査を実施するなど、これまでに引き続き順調に事業を実施できた。 本館(明治古都館)の改修については、建物外周部の発掘調査を実施し、重要文化財建造物と地下遺構の関係を把握することで、それらの保存とともに展示物の保存・観覧環境を向上させる改修計画のための資料を得ることができた。						

大項目	I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置							
中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承①博物館の施設設備の整備							
【年度計画】 (4館共通) 1) 収蔵・展示施設及びこれらに関連する設備に関するメンテナンスサイクルの確立に向けた検討を引き続き行う。 (奈良国立博物館) 1) 構内バリアフリー及びエントランス拡張整備に向けた検討を引き続き行う。								
担当部課	総務課			事業責任者	課長 臣守常勝			
【実績・成果】 (4館共通) 1) ・各種設備に関するメンテナンス更新計画に基づき概算要求を行った。 ・ボイラー設備の更新を実施した。 ・直流電源装置用蓄電池の更新を実施した。 ・池水ろ過装置の更新を実施した。 (奈良国立博物館) 1) 構内バリアフリー及びエントランス拡張整備計画の検討を行った。								
【補足事項】 (4館共通) 1) ・各種設備のメンテナンス更新計画及び状況調査に基づき概算要求を行った。 ・展示室の適正な温湿度管理のため、なら仏像館のボイラー設備の一部更新を行った。 ・老朽化したなら仏像館、直流電源用蓄電池の更新を行った。 ・東西新館前、池水の除鉄ろ過装置の更新を行った。 (奈良国立博物館) 1) ・エントランス拡張整備計画の図面上の見直しを行った。 ・構内バリアフリー対策として側溝蓋の改修を行った。								
								
一部更新したボイラー設備								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	28
-	-	-	-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評価：B 		メンテナンスサイクルの更新計画に基づき概算要求を行うとともに、緊急度の高い機器については一部、運営費補助金で更新を行った。						
【中期計画記載事項】								
施設設備の点検・診断を実施し、その結果に基づき、収蔵・展示施設の老朽化、耐震対策及びセキュリティの強化に計画的に取り組む。これらの取組を通じて得られた施設の状態や対策履歴等の情報を記録し、次期点検・診断等に活用するという「メンテナンスサイクル」を平成32年度までに構築し、継続的に発展させる。 (奈良国立博物館) 構内のバリアフリー化やエントランスの拡張等観覧環境等の改善及び展示施設の改修等を図るとともに、奈良における文化財の調査研究等の拠点として必要な研究設備を整備する。								
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評価：B 		構内バリアフリー化については一部改修を実施し、また、狭隘なエントランスの拡充、空調設備機器、展示並びに収蔵スペースの整備について、29年度に引き続き検討を行った。 29年度に策定したメンテナンスサイクル更新計画に基づき老朽化した設備機器の計画的な更新を引き続き進めていくとともに、31年度以降も継続的に更新計画の見直しを行っていく。						

大項目	Ⅰ 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置							
中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ①博物館の施設設備の整備							
【年度計画】 (4館共通) 1) 収蔵・展示施設及びこれらに関連する設備に関するメンテナンスサイクルの確立に向けた検討を引き続き行う。 (九州国立博物館) 1) 開館から12年が経過し、施設設備備品に老朽化がみられるため展示施設の維持管理を目的とした改修及び拡充を行う。								
担当部課	学芸部文化財課 学芸部企画課 総務課 広報課			事業責任者	課長 原田あゆみ 課長 白井克也 課長 國谷勝伸 課長 田中正一			
【実績・成果】 (4館共通) 1) 収蔵・展示施設及びこれらに関連する設備に関するメンテナンスサイクル計画の作成を行った。 (九州国立博物館) 1) ・特別展示室第1,2室に設置されている展示ケースのパッキンを交換した。 ・施設の10年整備計画について、より精度を向上させるため、計画作成の見直しを検討した。 ・老朽化が著しく、緊急度・重要度の高い監視カメラ及び空調機器（プレート式熱交換器）の一部改修工事を行った。 ・開館から13年（年度計画時は12年）が経過していることから、施設・設備について、法定耐用年数の超過、部品製造の終了、故障頻度の増加等に備えて、各施設・設備の維持管理・改修・更新・長寿命化等を計画的に実施していくために、九州国立博物館個別施設計画を策定した。								
【補足事項】 (九州国立博物館) 1) 展示ケース開口部のパッキンは経年劣化により隙間が生じていた。また、壁とガラスの境にあるコーキングは経年劣化により柔軟性が失われていた。今回の交換作業により見栄えだけでなく、温湿度管理上も改善が図られた。既存のガラス飛散防止フィルム除去・クリーニングを行った。改めて飛散防止効果を有する低反射フィルムを施工し、これによりガラス面への映り込みが低減し、展示効果が大きく高まった。								
								
パッキンおよび低反射フィルム に交換した壁付展示ケース								
【定量的評価】 項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
-	-	-	-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 3階特別展示室第1,2室の展示ケース改修を行うなど、年度計画どおり、展示施設の維持管理を目的とした改修及び拡充を行った。						
【中期計画記載事項】 施設設備の点検・診断を実施し、その結果に基づき、収蔵・展示施設の老朽化、耐震対策及びセキュリティの強化に計画的に取り組む。これらの取組を通じて得られた施設の状態や対策履歴等の情報を記録し、次期点検・診断等に活用するという「メンテナンスサイクル」を32年度までに構築し、継続的に発展させる。 (九州国立博物館) 開館から10年が経過しており、監視カメラ・空調システム等の施設設備備品に老朽化がみられる。よって展示施設の維持管理を目的とした改修等計画を推進する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 施設設備の点検・診断を実施し、緊急度、更新時期等の再調査を行い、10年整備計画の見直しを行った。 また、監視カメラや空調機器等の改修工事を実施したほか、九州国立博物館個別施設計画を策定した。 31年度以降は、照明設備などについて、設備や器具の更新を行いたい。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の収集等 1) 有形文化財の収集							
【年度計画】 (東京国立博物館) 日本を中心として広くアジア諸地域の文化の体系的収集及び展示を目指し、絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料の中から重点的に購入する。								
担当部課	学芸研究部列品管理課			事業責任者	課長 救仁郷秀明			
【実績・成果】 (東京国立博物館) ・購入件数 31件 内訳：絵画1件、書跡1件、彫刻1件、染織23件、考古3件、歴史資料1件、東洋陶磁1件 ・決算額 146,840,000円 30年度は、絵画1件 重要美術品「山水図押絵貼屏風」、書跡1件 「和歌屏風」、彫刻1件 「能面 増女」、染織23件 「上衣・括袴 萌黄地向獅子丸龍卍蜀江文模様錦」ほか蜂須賀家伝来武家装束、考古3件 「石室寺経塚出土品（銅製経筒）」ほか石室寺経塚出土品、歴史資料1件 「簠斎蔵封泥拓本冊」、東洋陶磁1件 「青花人物図面盆」の計31件を購入した。								
【補足事項】 ・絵画購入品の重要美術品「山水図押絵貼屏風」は、久隅守景の山水図の代表的作例として極めて重要であり、当館所蔵の近世狩野派コレクションの一層の充実を図ることができる作品である。 ・染織購入品の蜂須賀家伝来武家装束は、武家服飾の中でもとりわけ華麗なデザインで他に類を見ないことから、展示効果が高い。また、伝来の明らかな武家装束がまとまった形で遺される例は極めて稀であり、その点からも意義が大きい。 ・歴史資料購入品の簠斎蔵封泥拓本冊は、清朝金石学の研究上大変貴重であるうえ、拓影が収載された封泥の大半は現在当館の所蔵となっているため、当館が所蔵するのにふさわしい資料である。 ・東洋陶磁購入品の「青花人物図面盆」は、在銘の万暦官窯の青花として稀少であるとともに、万暦特有の重厚さを備えた一級品であり、展示活用や研究のより一層の充実が期待できる。				 [購入品] 上衣・括袴 萌黄地向獅子丸龍卍蜀江文模様 (蜂須賀家伝来)				
【定量的評価】項目		30年度実績	目標値	評価	26	27	28	29
収蔵品件数	119,064件	-	-	経年変化	116,268	116,932	117,190	117,460
うち国宝	89件	-	-		87	87	88	89
うち重要文化財	644件	-	-		634	634	636	643
収集件数	1,606件	-	-		615	664	199	268
うち購入件数	31件	-	-		9	16	11	12
うち寄贈件数	72件	-	-		100	148	44	84
うち編入件数	1,503件	-	-		5,069	500	144	172
文化財購入費	146,840千円	-	-		139,686	225,880	662,350	252,720
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 蜂須賀家伝来の武家装束並びに当館所蔵封泥の拓本でほぼ構成されている「簠斎蔵封泥拓本冊」など、収蔵する機会が稀である貴重な作品を多く購入することができた。特定の分野に偏ることなく、年度計画に記載される複数分野からバランスよく購入することができた。						
【中期計画記載事項】 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各博物館の収集方針に沿って、調査研究及び情報収集の成果、並びに外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。 (東京国立博物館) 日本を中心として広くアジア諸地域等にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 蜂須賀家伝来の武家装束や「簠斎蔵封泥拓本冊」など日本を中心にアジア諸地域で制作された美術、考古資料及び歴史資料を収集し、中期計画に沿った成果を上げることができた。31年度も引き続き情報収集に努め、適時適切な収集を図る。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の収集等 1)有形文化財の収集							
【年度計画】 (京都国立博物館) 京都文化を中心とした絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料等の中から重点的に購入する。								
担当部課	学芸部							
事業責任者	列品管理室長 羽田聡							
【実績・成果】 (京都国立博物館) ・購入件数12件 内訳：絵画3件、金工1件、漆工2件、染織1件、考古5件 ・決算額 106,340,000円								
【補足事項】 30年度は、「霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風 狩野永納筆」、「暮山図・澤瀉鵲鵲図扇面」、「松石図(指頭画) 葉文舟筆」、「重要文化財 太刀 銘国吉」、「梨撫子蒔絵楊弓箱」、「ドミティアヌス帝の模擬海戦場図蒔絵プラーク」、「濃茶麻地花車杜若文様染織帷子」、「重要美術品 龍虎獣帯鏡」、「流雲文方格神人霊獣画像鏡」、「金銀平脱鸞鳳宝相華文方」、「羽状地文四山」、「夔鳳雷文鏡 洛陽金村出土」を購入した。								
 重要文化財 太刀 銘国吉 (特別展「京のかたな」に出品)  霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風 狩野永納筆 (特集展示「初公開！天皇の即位図」にて公開)								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経 年 変 化	26	27	28	29
収蔵品件数	8,075件	-	-		7,109	7,532	7,794	7,977
うち国宝	29件	-	-		27	28	28	29
うち重要文化財	196件	-	-		180	183	198	202
収集件数	98件	-	-		388	423	265	184
うち購入件数	12件	-	-		9	18	14	12
うち寄贈件数	86件	-	-		379	405	251	172
うち編入件数	0件	-	-		0	0	0	0
文化財購入費	106,340千円	-	-	227,452	797,790	130,088	291,808	
【年度計画に対する総合評価】 評定：A		【判定根拠、課題と対応】 30年度特別展「京のかたな」で公開された重要文化財1件、特集展示「初公開！天皇の即位図」にて公開された作品を含む12件の京都に関わりの深い作品を購入することが出来た。これまでの調査研究の成果を活かし、重要文化財や即位図などの時機にかなった作品を購入し、展示や調査研究に活用できたことは所期の目標を上回る成果であった。						
【中期計画記載事項】 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各博物館の収集方針に沿って、調査研究及び情報収集の成果、並びに外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。 (京都国立博物館) 京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 30年度も、展示・研究に役立てることが出来る、京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等について他分野にわたりバランスよく購入することができた。 今後も当館の展示・研究において十分に活用が期待できる作品の購入を順次行っていく予定である。						

*30年度、京都国立博物館については、指定品件数を再確認し、過誤修正を行った。

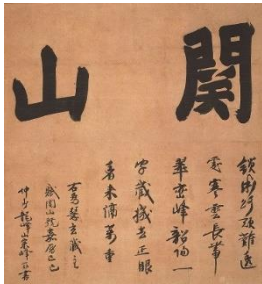
中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の収集等 1) 有形文化財の収集							
【年度計画】 (奈良国立博物館) 仏教美術及び奈良を中心とした絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料等の中から重点的に購入する。								
担当部課	学芸部			事業責任者	部長 内藤栄			
【実績・成果】 (奈良国立博物館) 30年度に購入した文化財は以下の6件である。 ・紙本墨画春日名号曼荼羅 1幅 ・金銅装説相箱 1口 ・絹本着色春日宮曼荼羅 1幅 ・金銅鬼面五鈷杵 1口 ・法華経 卷第四残巻 1巻 ・盛装男子埴輪 1軀 決算額：101,564,000円								
【補足事項】 購入文化財のうち法華経 卷第四残巻 1巻は、平安時代末(12世紀)の作と推定されるもので、装飾料紙に書写された1巻の『法華経』から切り出された断簡3片を貼り継いだものである。残存するのは105行分。料紙の装飾は、大小に切った銀箔を用いた華麗なもので、そこに金の截金で界線を引き、経文を墨書する。銀箔による料紙装飾はオモテ面だけでなく文字のないウラ面にも施される。こうした装飾経の遺例は多いが、料紙装飾に金箔を一切用いず、銀箔に特化している点が珍しい。								
								
法華経巻第四 (残巻)								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
収蔵品件数	1,908 件	－	－		1,877	1,883	1,886	1,893
うち国宝	13 件	－	－		13	13	13	13
うち重要文化財	113 件	－	－		111	112	112	113
収集件数	15 件	－	－		15	6	3	7
うち購入件数	6 件	－	－		15	4	2	6
うち寄贈件数	9 件	－	－		0	2	1	1
うち編入件数	0 件	－	－		0	0	0	0
文化財購入費	101,564千円	－	－		261,960	140,400	5,040	550,000
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 仏教美術を中心とする文化財を多数収集することができた。購入は絵画、書跡、工芸、考古の3分野にわたる6件で、限られた予算のなか、バランス良く実施できている。今後もこの方針を継続し、さらに幅広く文化財の収集を心がける。						
【中期計画記載事項】 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各博物館の収集方針に沿って、調査研究及び情報収集の成果、並びに外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。 (奈良国立博物館) 仏教美術及び奈良を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 仏教美術及び奈良を中心とする収集方針は一貫している。体系的観点では、28年度は書跡、29年度は彫刻・絵画、30年度は絵画・書跡・工芸・考古と、分野のバランスもとれており、体系的な収蔵品の蓄積が実現できている。今後も、一貫した調査・研究・収集の方針に基づいて文化財収集を継続する。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の収集等 1)有形文化財の収集								
【年度計画】 (九州国立博物館) 日本とアジア諸国との文化交流を中心とした絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料等の中から重点的に購入する。									
担当部課	学芸部文化財課			事業責任者	課長 原田あゆみ				
【実績・成果】 ・購入件数 105 件。 内訳：絵画 2 件、書跡 1 件、彫刻 1 件、金工 1 件、刀剣 1 件、陶磁 15 件、漆工 1 件、染織 6 件、考古 72 件、歴史資料 5 件。 ・決算額 907, 943, 600 円 当館の展示テーマである、日本とアジア諸国との文化交流を示す作品を中心に収集した。国宝「刀 無銘則房」や「如来坐像」、「長崎港図」などの優れた文化財を 105 件購入した。									
【補足事項】 ・絵画分野では2件を購入した。川原慶賀筆と考えられる「長崎港図」は、安政2年(1855)に来日したリンデン伯爵ヨハン・マウリッツ(1807-64)が所持していたもの。黄檗宗の開祖・隠元の深い関与がうかがわれる「列祖図冊」は、黄檗宗の日本での展開を象徴する作例として意義深い。長崎や黄檗をテーマとした作品は、開館以来、収集を継続し、30年度も購入によりコレクションの充実を図ることができた。 ・彫刻分野では1件を購入した。「如来坐像」は平安時代後期木彫仏の特徴が顕著であり、半丈六の大きさをほこる。こうした作品が市場に出ることは稀であり、展示効果もきわめて高い。 ・刀剣分野では1件を購入した。国宝「刀 無銘則房」は、備前国の福岡を拠点に作刀を行った一文字派の代表的刀工、則房の作と極められた貴重な作例である。華やかな刃文で知られる一文字派のなかでも白眉と言える名刀であり、当館を代表するコレクションとなった。 ・考古分野では72件を購入した。「鉢形土器」は縄文時代早期に広域展開した押型文土器の典型例で、当時の交流を考える上で重要な土器である。「深鉢形土器」は縄文時代前期の東北北部に分布する円筒下層式土器の典型例で、類品が中国東北部で出土しており、この時代の対外交流を考える上で貴重である。「ローマンガラス器」はおもに吹きガラス技法による実用的な容器類であるが、多彩な装飾技法や器形がみられ、展示効果も高い。 ・歴史資料分野では 5 件を購入した。「豊臣秀吉朱印状」は、宗義智(1568-1615)宛の豊臣秀吉(1537-98)朱印状であり、義智から贈られた歳暮の祝儀に対して礼を述べたもの。宗家から流出した秀吉関係文書を構成する一部として重要な史料である。 ・これらの多くが日本と大陸の文化交流を物語る作例であり、あるいは時代の美意識や工芸技術の高さを示す優品である。									
国宝 刀 無銘則房 									
【定量的評価】項目		30年度実績	目標値	評価		26	27	28	29
収蔵品件数		1, 164件	-	-	経年変化	512	525	583	878
うち国宝		4件	-	-		3	3	3	3
うち重要文化財		41件	-	-		29	34	37	39
収集件数		286件	-	-		19	13	58	295
うち購入件数		105件	-	-		14	5	36	34
うち寄贈件数		181件	-	-		5	8	22	261
うち編入件数		0件	-	-		0	0	0	0
文化財購入費		907, 943千円	-	-		727, 228	609, 288	640, 412	640, 636
【年度計画に対する総合評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 所蔵者との信頼関係に支えられ、30年度も収集件数を大きく伸ばすことができた。当館として収蔵すべき文化交流を端的に示す作品のほか、国宝「刀 無銘則房」や「如来坐像」など、時代の美意識を示す作品とをバランスよく収集した。						
【中期計画記載事項】 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各博物館の収集方針に沿って、調査研究及び情報収集の成果、並びに外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。 (九州国立博物館) 日本とアジア諸地域等との文化交流を中心とした、美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 中期計画3年目の30年度も、日本とアジア諸国との文化交流を中心とした絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料を多数購入、寄贈を受けることにより、貴重な作品を多数収集することができた。今後も、購入、受贈に努め、より一層のコレクションの充実を図りたい。						



国宝 刀 無銘則房

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管・次代への継承 (2) 有形文化財の収集等 (3) 寄贈・寄託品の受入れ等								
【年度計画】 (4 館共通) 寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかける。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努める。また、展示に必要な文化財の寄贈を受け入れる。									
担当部課	学芸研究部列品管理課			事業責任者	課長 救仁郷秀明				
【実績・成果】 (4 館共通) 寄贈 ・新規寄贈品件数 72件 内訳：絵画 11件、書跡 9件、彫刻 2件、金工 1件、陶磁 3件、染織 3件、東洋絵画 15件、東洋書跡 18件、東洋金工 6件、東洋染織 1件、東洋考古 3件 寄託 ・新規寄託品件数 45件 内訳：絵画 18件、彫刻 1件、金工 2件、刀剣 20件、東洋陶磁 4件 ・寄託品は新規に45件を受け入れた。返却24件のうち4件は寄贈品として受理し、1件は登録美術品として受け入れた。									
【補足事項】 寄贈 ・作品の寄贈については23人の所蔵者から、72件の文化財を受け入れた。 ・「染付龍涛文壺」は、ヨーロッパ向け輸出品として伝わる初代宮川香山の作品であるが、当館収蔵品とあわせて展示することで、初代宮川香山の時代順や技法、釉法別に展覧することが可能である。 ・「明賢集扇帖」は、明・清時代の様々な名家の旧蔵資料としても貴重であり、展示活用が期待される。 ・「雛人形及び雛道具」は、江戸時代に江戸の地において制作された雛飾り一式として極めて貴重な作品である。また、これまで当館に収蔵されてきた雛人形には、江戸の地で制作された作品がほとんどなく、その欠を埋める重要なコレクションである。毎年3月に実施している雛人形の展示では、京都産の作品を中心に行ってきたが、今回の寄贈品は江戸の雛人形として今後の展示に大いに活用できる。  〔寄贈品〕 明賢集扇帖 寄託 ・作品の寄託については2機関2個人から、45件の文化財を新規に受け入れた。 ・寄託品のうち、重要文化財は「柿本人麻呂像」など、絵画2件、彫刻1件である。									
【定量的評価】	項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
	新規寄贈品件数	72件	-	-		100	148	44	84
	寄託品件数	3,130件	-	-		3,064	3,072	3,075	3,109
	うち新規寄託品件数	45件	-	-		604	31	37	71
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】							
評定：B		重要文化財の新規寄託3件を含め、寄贈、寄託ともに、展示を充実させることができる作品を収集することができた。寄託品件数も順調に推移している。また、登録美術品についても、寄託品から1件を受け入れた。							
【中期計画記載事項】									
収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。									
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】							
評定：B		中期計画に基づき寄贈・寄託品の受け入れをバランスよく行った。個人コレクターからのまとまった寄贈を積極的に受理した。寄託についても、公益財団法人常盤山文庫から重要文化財2件を含む良質なコレクションを受け入れ、展示の充実を図ることができた。31年度も、寄託者との信頼関係を維持・拡大し、寄贈・寄託の推進に努める。 なお仏像については、寄託者側の保管施設の充実化に伴い、当館への寄託メリットを高めなければ減少傾向に歯止めがかからないため、何らかの対策が求められる。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の収集等 2) 寄贈・寄託品の受入れ等							
【年度計画】 (4館共通) 寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかける。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努める。また、展示に必要な文化財の寄贈を受け入れる。								
担当部課	学芸部			事業責任者	列品管理室長 羽田聡			
【実績・成果】 (4館共通) ・寄贈 新規寄贈品件数86件 ・寄託 新規寄託品件数232件 内訳：国宝「大燈国師墨蹟 関山字号（嘉暦己巳仲春）」、重要文化財「短刀 銘長谷部国重」等								
【補足事項】 30年度は、下記の2点をはじめとした新規寄託品を網羅的に収集することができた。								
								
国宝「大燈国師墨蹟 関山字号（嘉暦己巳仲春）」				重要文化財「短刀 銘長谷部国重」				
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
新規寄贈品件数	86件	-	-		379	405	251	172
寄託品件数	6,434件	-	-		6,001	6,112	6,189	6,235
うち新規寄託品件数	232件	-	-		162	232	227	79
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評価：A		展示に活用できる寄贈品及び寄託品（国宝1件、重要文化財1件を含む）を多分野にわたりバランス良く受け入れることができた。31年度の特集展示「新収品展」をはじめ、今後の当館の展示において十分に活用が期待できる。						
【中期計画記載事項】								
収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。								
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評価：A		国宝1件、重要文化財1件を含む多様な文化財の寄託・寄贈を受け入れ、収蔵品を順調に増加することができた。 また、特別展等において既存の寄託品を展示に活用するとともに、22年から29年3月までに受け入れた寄贈品の一部を30年度の特集展示「新収品展」で公開、29年度の廣海家寄贈顕彰に続き、大型寄贈を顕彰する特集展示「松井コレクション受贈記念 美麗を極める中国陶磁」などの積極的な公開を心掛けており、収集のみならず活用の面でも大きな成果を上げた。						

*30年度、京都国立博物館については、寄託品数を再確認した結果、過誤修正を行った。

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の収集等 2) 寄贈・寄託品の受入れ等							
【年度計画】 (4館共通) 寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかける。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努める。また、展示に必要な文化財の寄贈を受け入れる。								
担当部課	学芸部			事業責任者	部長 内藤栄			
【実績・成果】 (4館共通) 寄贈 30年度に寄贈を受けた文化財は以下の9件である。 ・絹本着色山越阿弥陀図 1幅 ・絹本着色阿弥陀二十五菩薩来迎図 1幅 ・般若心経(隅寺心経) 1幅 ・大般若経 卷第三百十六(断簡) 1幅 ・刺繍種子地藏菩薩像 1幅 ・百万塔 附 無垢浄光経陀羅尼 1基 ・木内半古 七ヶ條ノ事 1紙 ・紅牙撥鏤撥 模造 村松親月作 附 撥鏤参考資料 1枚 ・古瓦(故原田良雄氏コレクション第3回分) 3点 寄託 寄託を受け入れた文化財は以下の18件である。 ・彫刻1件：奈良県指定文化財「木造大日如来坐像」1軀(十市町自治会) ・絵画2件：重要文化財「絹本着色仏涅槃図」1幅(汾陽寺)他1件 ・工芸7件：重要文化財「木造天蓋 附属 飛天像 琵琶」1軀(法隆寺)他6件 ・書跡8件：「古今和歌集 上・下」2帖(個人)他7件								
【補足事項】 寄託 ・彫刻部門で受け入れた「木造大日如来坐像」は、類例の少ない半丈六の大日如来像で、近年の保存修理により平安時代(12世紀)の当初の姿が甦ったため展示効果が期待される品である。 ・絵画部門では重文指定品の仏涅槃図を受け入れた。平安時代(12世紀)に遡る涅槃図の大幅は現存例が少なく極めて貴重な作品である。 ・工芸部門は三幅一対として伝来した刺繍作品で、南北朝から室町時代(13～14世紀)に遡る稀少かつ優れた作品であり高い展示効果が期待される。さらに金工品として優れた作行きをみせる蓮華文磬を受け入れた。これは鎌倉から南北朝時代(13～14世紀)に位置づけられる稀少な遺品で、展示の充実化への貢献が期待される。								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年 変化	26	27	28	29
新規寄贈品件数	9件	-	-		0	2	1	1
寄託品件数	1,974件	-	-		1,984	1,956	1,958	1,962
うち新規寄託品件数	18件	-	-		7	7	37	12
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 寄贈品、寄託品とも極めて質の高い逸品を受け入れることができた。特に寄託品は重要文化財指定品を含み、それ以外も指定品相当の高い評価が与えられる作品である。寄贈品は例年を上回る数を受け入れることができ、展示への活用、充実が大いに期待されるところである。						
【中期計画記載事項】 収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 重要文化財指定品クラスの寄贈・寄託品の受け入れは、社寺やコレクターとの深い信頼関係のもとで成り立つことであり、奈良国立博物館の目立たぬ「財産」である。30年度はこれを絵画、書跡、工芸、彫刻、考古のすべての部門で受け入れを達成している。中期計画に対する取り組みは順調である。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の収集等 2) 寄贈・寄託品の受け入れ等							
【年度計画】 (4館共通) 寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかける。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努める。また、展示に必要な文化財の寄贈を受け入れる。								
担当部課	学芸部文化財課			事業責任者	課長 原田あゆみ			
【実績・成果】 ■寄贈 ・大阪在住のコレクターである阿形哲夫氏より139件の大型寄贈を受け入れた。 内訳：絵画1件、陶磁23件、考古115件。 寄贈品のうち、もっとも充実した分野は考古と陶磁で、「深鉢形土器」は縄文時代中期の日本列島全域に展開したキャリパー形の土器であり、特に装飾が過剰であった北辺部の状況を知る上で貴重である。また、中国・宋時代の磁州窯製品と見なされる「白磁碗」や中国陶器からの影響を受けて掻き落としの手法で製作されたペルシャ製「鳥獣文鉢」をはじめ、縄文～奈良時代の土器や中近世の陶磁、中国陶磁、ローマンガラスやイスラム陶器など多岐にわたる。 ・阿形コレクション以外では42件の寄贈を受け入れた。 内訳：書跡34件、漆工4件、染織1件、考古3件。 「古今和歌集切『やましろの』」は新出の断簡で、鎌倉時代前期のかなの特徴を十分に備え、展示効果も高い。								
								
					深鉢形土器			
■寄託 ・7件の新規寄託があった。 内訳：絵画1件、刀剣4件、考古2件。 古墳時代の金銅製馬具や黄檗画家の先駆と言える喜多道矩（?-1663）による頂相など、いずれも日本とアジア諸国との文化交流をテーマとする当館での活用が見込まれる作品の寄託を受け入れた。								
【補足事項】 阿形コレクションのうち、考古を中心とした作品を文化交流展示室で31年度に陳列予定である。また、29年度受贈した作品は、30年度秋より文化交流展示室内において開室した寄贈者顕彰室において紹介し、寄贈者を顕彰した。 共同運営の福岡県立アジア文化交流センターは30年度に、小郡カンツリー倶楽部から、当館の展示に活用できる江戸時代を中心とした陶磁器176件の寄贈を受けた。（福岡県立アジア文化交流センター所蔵の文化財総件数394件）								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
新規寄贈品件数	181件	-	-	変 化	5	8	22	261
寄託品件数	931件	-	-		795	885	893	934
うち新規寄託品件数	7件	-	-		12	97	44	45
【年度計画に対する総合評価】 評定：S		【判定根拠、課題と対応】 当館がテーマとする文化交流を基軸に据えた寄贈品・寄託品の受け入れを、分野のバランスよく行うことができた。特に139件もの大型寄贈である阿形コレクションは質量ともに充実した内容を誇る一群であり、当館のコレクションの核となるものである。						
【中期計画記載事項】 収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。								
【中期計画に対する評価】 評定：S		【判定根拠、課題と対応】 当館がテーマとする文化交流を基軸に据えた寄贈品・寄託品の受け入れを、分野のバランスよく行うことができた。受け入れにあたっては、できるだけ迅速に多分野の研究員による事前調査を行い、当館への寄託、寄贈につなげるべく交渉を行った。その結果、特に考古分野は、縄文土器の優品や古墳の副葬品、中国の彩陶など多彩である。また、陶磁器分野では、当館のテーマにふさわしい宋代の白磁碗をはじめ、文化交流展示に大いに活用できる資料が加わった。29年度の大型寄贈に引き続き、多数の寄贈を受け入れたことで、コレクションが飛躍的に充実した。30年度末から31年度にかけて、阿形コレクションの考古を中心とした作品を、31年6月から、その他の新収品を「新収品展」として展示する予定である。今後も寄贈・寄託品の受け入れと活用を積極的に行っていきたい。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 1)有形文化財の管理 1/2							
【年度計画】 (4館共通) ア 収蔵等に必要な施設設備の充実、改善に向けた検討を行う。 イ 定期的に寄託品の所在確認作業を行う。 (東京国立博物館) ア 収蔵品及び一時預品の情報調査を継続して行う。 イ 古写真・ガラス乾板・館史資料等の旧資料部関係品を整理し、列品として編入活用・公開するための作業を進める。								
担当部課	学芸研究部列品管理課			事業責任者	課長 救仁郷秀明			
【実績・成果】 (4館共通) ア 収蔵等に必要な施設設備の充実、改善に向けた検討を行った。 イ 定期的に寄託品の所在確認作業を行った。 (東京国立博物館) ア 収蔵品及び一時預品の情報調査を継続して行った。 イ 古写真・ガラス乾板・館史資料等の旧資料部関係品を整理し、列品として編入活用・公開するための作業を進めた。								
【補足事項】 (4館共通) ア 本館改修工事に伴って列品を移動し収納するため新規収蔵庫の棚、扉、床、セキュリティ等の仕様を検討した。 また、黒田記念館収蔵庫の絵画ラック設置、東洋館収蔵庫の棚板増設、刀剣収蔵庫の棚のゴムパッキンの劣化に伴う改修を行った。 (東京国立博物館) ア 未整理、未登録の法隆寺献納宝物1件、考古資料2件について作品調査を行い、列品として編入した。 イ 1,500件の写真資料を整理し、列品として編入した。								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
収蔵施設の収容率	133.8%	－	－		－	－	180%	180%
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 年度計画に基づき、順調に成果をあげている。未整理、未登録等の法隆寺献納宝物、考古資料、写真資料について列品への編入を行った。						
【中期計画記載事項】 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えるため、収蔵品等の管理を徹底し、特に収蔵品等の増加に伴い収蔵に必要な施設設備の充実、改善を図る。また、収蔵品等の現状を確認の上、(中略)展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。(略)								
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画に基づき順調に成果をあげている。特に、収蔵等に必要な施設設備の充実、改善に向けた検討を滞りなく進めることができた。また、今後、数か年に及ぶとみられる写真資料の編入を開始することができた。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信														
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 1) 有形文化財の管理 2/2														
【年度計画】 (4館共通) ウ 収蔵品・寄託品等に関し、新規にデジタル撮影した画像等を蓄積し、それらに関する基本情報のデータ化及びデータ整備を引き続き推進する。 エ 文化財情報システム（業務システム）の運用を継続し、収蔵品データを更新する。 (東京国立博物館) ウ 外部への公開を見据えた「列品管理プロトタイプデータベース」(学芸業務支援システム protoDB)の構築を進め、博物館機能の充実を図る。 エ 列品にかかる統計業務の精度を高め、効率化をはかるべく、列品台帳のデジタル・アーカイブ化と情報の利活用向上に向けたシステム導入に向けて取り組む。 オ 収蔵品の和古書・洋古書のデジタル化を前中期目標の期間の実績の年度平均以上実施し、公開を推進する。 カ ガラス乾板・未整理のブローニー・スライド・写真カード等のデジタル化について引き続き検討する。															
担当部課	学芸企画部博物館情報課 学芸研究部列品管理課			事業責任者	課長 田良島哲 課長 救仁郷秀明										
【実績・成果】 (4館共通) ウ 収蔵品・寄託品に関し、新規にデジタル撮影した画像は画像管理システムに随時登録し、データ整備を推進した。 エ 「列品管理プロトタイプデータベース」(学芸業務支援システム protoDB)の運用を継続し、収蔵品データを更新した。 (東京国立博物館) ウ 「列品管理プロトタイプデータベース」について、作品に関連する文献データを管理する機能を実装した。 エ 収蔵する美術品台帳について113,049件のデジタル撮影を行った。また、美術品台帳のデジタル画像から12,386件のテキストデータ化を行った。「収蔵品データ管理システム」のデータ整備を推進した。 オ 収蔵する和古書・漢籍（戦前の展覧会目録を含む）について25,575件のデジタル撮影を行った。 カ 未整理のブローニーフィルムのデジタル化に向けて、引き続き検討した。															
【補足事項】															
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	26	27	28	29							
収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数	25,575件	24,471件	B		36,811	30,013	25,334	26,972							
和古書・漢籍	25,575件	－	－		25,911	13,924	20,224	19,002							
洋古書	0件	－	－		10,820	16,089	5,110	7,970							
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 順調に成果を挙げている。デジタル撮影した画像の登録、及び「列品管理プロトタイプデータベース」における文献データの管理により業務、調査研究の効率化を図ることができた。													
【中期計画記載事項】 (略) 収蔵品等の現状を確認の上、管理に必要なデータ（画像データ、テキストデータ等）を整備して、展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。なお、収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。															
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画に基づき順調に成果を挙げている。画像データを継続的に蓄積するとともに、文献データなどの文字データの整備を推進し、業務や調査研究に役立てた。和古書のデジタル化も前中期目標の期間の実績以上とすることができた。													

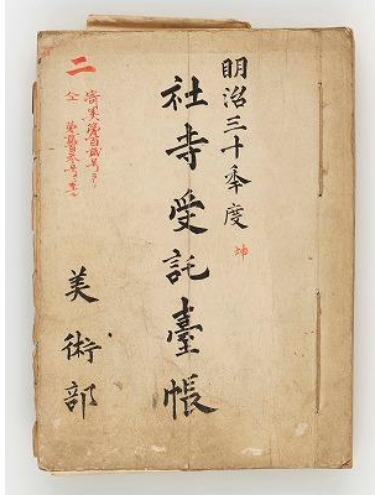
中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 1) 有形文化財の管理 1/2							
【年度計画】 (4館共通) ア 収蔵等に必要な施設設備の充実、改善に向けた検討を行う。 イ 定期的に寄託品の所在確認作業を行う。								
担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長 羽田聡					
【実績・成果】 (4館共通) ア 30年度は、陶磁収蔵庫の改善を実施すべく、陶磁作品を収納するためのボテ箱を6個作成した。これにより、比較的小さいサイズの作品を収蔵庫内で効率よく収蔵することが出来るようになり、収蔵スペースの確保に繋げることができた。 イ 毎年度2回行う寄託品の期間継続手続きにあわせて、寄託品の所在確認作業を行った。また、収蔵品・寄託品に関し、必要に応じて文化財情報システムを適宜修正した。								
【補足事項】 ア 陶磁収蔵庫における収納効率を上げるためのボテ箱の作成前後の様子								
								
改善前		改善後						
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
収蔵施設の収容率	100%	-	-	-	-	-	100%	100%
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 30年度は陶磁収蔵庫において、作品収納用のボテ箱を製作することで、収蔵スペースの確保を達成し、施設設備の充実と改善を計画的に実施、大量の寄託の受け入れに対応することができた。 寄託品の所在確認作業も予定通り2回実施することができた。						
【中期計画記載事項】 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えるため、収蔵品等の管理を徹底し、特に収蔵品等の増加に伴い収蔵に必要な施設設備の充実、改善を図る。また、収蔵品等の現状を確認の上、(中略)展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。(略)								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 30年度も環境モニタリング等のデータを活用し、展示・調査研究等の業務に活かすことができた。また、収蔵スペース確保のために、外注で陶磁作品収納用のボテ箱を製作し、収蔵庫内に効率よく収蔵出来るようにした。今後も、各分野の収蔵状況を考慮したうえで収蔵庫スペースの確保に向け検討を進めていく。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 1) 有形文化財の管理 2/2								
【年度計画】 (4館共通) ウ 収蔵品・寄託品等に関し、新規にデジタル撮影した画像等を蓄積し、それらに関する基本情報のデータ化及びデータ整備を引き続き推進する。 エ 文化財情報システム(業務システム)の運用を継続し、収蔵品データを更新する。 (京都国立博物館) ア 収蔵品写真等のガラス乾板・マイクロフィルム・カラーフィルム等のデジタル化を実施する。									
担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長 羽田聡						
【実績・成果】 (4館共通) ウ 収蔵品・展覧会出品作品等の新規撮影は、デジタル撮影を6,520件(カット)行った。 エ 収蔵品のデジタルデータを作成し、文化財情報システムへ登録した。(30年度登録件数:30,506件) ・購入、寄贈、寄託等に伴い、文化財情報システムの収蔵品データを適宜更新し、展示・調査研究に役立てた。 (京都国立博物館) ア 収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を継続し、3,380件実施した。以下、内訳を記す。 ＊館内のフィルム用スキャナを運用しつつ、外部委託による既存フィルムのデジタル化を進め、30年度は3,307枚のデジタル化を行った。 ＊継続してマイクロフィルムのデジタル化を進めており、30年度は73リール(49,033コマ)のデジタル化を行った。									
【補足事項】 (4館共通) ウ 当館の展覧会出品作品の撮影は、特別展「京のかたな」(9月29日～11月25日)、特別展「時宗二祖上人七百年御遠忌記念 国宝 一遍聖絵と時宗の名宝」(31年4月13日～令和元年6月9日)、特別展「流転100年 佐竹本三十六歌仙絵と王朝の美」(令和元年10月12日～11月24日)を対象として進めた。 ・特集展示「美麗を極める中国陶磁」(12月18日等、ポスター・チラシ・リーフレット・図録作成のため、作品の撮影を行った。 ・松井宏次氏寄贈作品(松井コレクション)・須磨コレクション等を含めた収蔵品の撮影を継続して行った。 ・調査研究事業「近畿地区(特に京都)社寺文化財の調査研究 河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」について、29年度に引き続いて観心寺を調査し、作品の撮影を行った。(処理番号 1411B エ参照) ・科学研究費助成事業による研究報告書作成のための撮影を行った。 (京都国立博物館) ア 外部委託とともに当館職員によるスキャニング作業を積極的に行い、費用削減を図りながら、フィルムのデジタル化を促進した。 ・ガラス乾板の整理作業は、京都造形芸術大学の協力の下、全てのデジタル化を終了した。今後は、調査データの入力及び、デジタル化したデータの整理作業を行う。 ・原板フィルムの保存状態改善のため、保存に適した収納箱への移し替えを継続して行った。									
【定量的評価】項目		30年度実績	目標値	評価	26	27	28	29	
収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数(既存フィルム)		3,380件	3,816件	C	経年変化	5,536	5,966	5,820	4,444
【年度計画に対する総合評価】 評価: B		【判定根拠、課題と対応】 29年度に比べ、デジタル化件数が減少している理由は、ガラス乾板のデジタル化が終了し、整理に移行したためである。31年度以降はマイクロフィルムと既存フィルムのデジタル化を積極的に進めていく。							
【中期計画記載事項】 (略) 収蔵品等の現状を確認の上、管理に必要なデータ(画像データ、テキストデータ等)を整備して、展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。なお、収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。									
【中期計画に対する評価】 評価: B		【判定根拠、課題と対応】 ガラス乾板のデジタル化が終了し、30年度はデータの整理に入ったことから、デジタル化件数自体は減少した。また、マイクロフィルムも来年度には全てデジタル化を終える予定であり、31年度も引き続きデジタル化件数は減少すると予想される。今後はデジタル化した画像を活用できるように整理を進めつつ、既存フィルムのデジタル化を積極的に進めていく。							

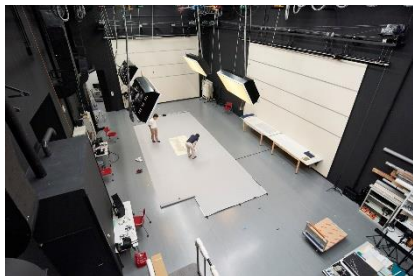


太刀 銘栗田口一竿子忠綱彫同作 宝永六年八月吉

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信														
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 1) 有形文化財の管理 1/2														
【年度計画】 (4館共通) ア 収蔵等に必要な施設設備の充実、改善に向けた検討を行う。 イ 定期的に寄託品の所在確認作業を行う。															
担当部課	学芸部			事業責任者	部長 内藤栄										
【実績・成果】 (4館共通) ア ・青銅器館ホールの窓サッシ部の結露対策改善のため空調設備を設置し、隣接した展示室(収蔵品)の温湿度の改善を行った。 ・施設設備の充実、改善に向けた検討を行う、環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループを毎月1回(計12回)開催した。 イ 寄託継続証の発行作業を通じて、各部門に収蔵状況の確認を勧め、さらに証書の発送・通知により寄託者の異動(宗教法人代表役員の交代や名義人の転居、死亡・相続等)を把握し、信頼関係のもとに寄託が継続するよう取りはからった。															
【補足事項】 (4館共通) ア 学芸部の書籍・絵画・彫刻・工芸・考古の各部門と施設担当部署で構成するワーキンググループを開催し、展示室、収蔵庫等施設の維持管理、充実・改善に向けた検討を行った。															
															
結露対策改善のため空調機設置															
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29							
収蔵施設の収容率	99%	-	-	-	-	-	99%	99%							
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 毎月1回、環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループを開催し、施設の維持管理、充実・改善に向けた検討を行った。ワーキングにより問題等を確認し、改善に向けた検討を行うことで、施設設備の充実、改善のほか収蔵庫保存環境の改善が図られた。													
【中期計画記載事項】 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えるため、収蔵品等の管理を徹底し、特に収蔵品等の増加に伴い収蔵に必要な施設設備の充実、改善を図る。また、収蔵品等の現状を確認の上、(中略)展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。(略)															
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 青銅器館ホールの空調設備設置により適切な温湿度管理を行うことができ、収蔵品の保存環境改善が図られた。 また、中期計画に沿って、寄託品の所在確認および寄託者の異動把握は順当に進められた。													

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 1) 有形文化財の管理 2/2							
【年度計画】 (4館共通) ウ 収蔵品・寄託品等に関し、新規にデジタル撮影した画像等を蓄積し、それらに関する基本情報のデータ化及びデータ整備を引き続き推進する。 エ 文化財情報システム（業務システム）の運用を継続し、収蔵品データを更新する。 (奈良国立博物館) ア 収蔵品について情報の整備を継続して実施し、収蔵品データベースの充実を図る。 イ 画像データベースの個別データを追加更新する。 ウ 修理記録・古写真・ガラス乾板等の整理とデジタル化を推進し、運用方法について引き続き検討する。 エ 収蔵品写真等の既存の白黒フィルムのデジタル化を進める。								
担当部課	学芸部	事業責任者	資料室長 宮崎幹子					
【実績・成果】 (4館共通) ウ 収蔵品・寄託品等に関し、新規にデジタル撮影した画像等を蓄積し、それらに関する基本情報のデータ化及びデータ整備を引き続き推進した。 エ 文化財情報システム（業務システム）の運用を継続し、収蔵品データを更新した。 (奈良国立博物館) ア 収蔵品について情報の整備を継続して実施し、収蔵品データベースの充実を図った。 イ 画像データベースの個別データを追加更新した（4,671件）。 ウ 修理記録・古写真・ガラス乾板等の整理とデジタル化を推進し、運用方法について検討した。 エ 収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を実施した（3,047件）。								
【補足事項】 写真（フィルム、ガラス乾板）のデジタル化、デジタル撮影を多数行うとともに、収蔵品データベース並びに画像データベースの更新を適宜行なった。 30年度より明治28年（1895）の開館以降の館蔵品・寄託品の状況を明らかにすべく、館史史料の整理に着手し、一部の目録作成と撮影を実施した。この結果、明治30（1897）年の「古社寺保存法」の制定を契機に社寺から多くの寄託品の受け入れがあったことが判明し、その成果を論文として発表した（山口隆介・宮崎幹子「明治時代の興福寺における仏像の移動と現所在地について－興福寺所蔵の古写真をもちいた史料学的研究－」『MUSEUM』676号、10月）。 31年度以降この作業を本格化させ、開館前後の文化財保護をめぐる社会的状況や、館蔵品・寄託品の内容、仏教美術専門館としての性格付けの契機などを史料に基づいて解明し、新たな歴史像の形成に向けて努力するとともに、文化財保護における博物館の役割と歴史的意義についても内外に向けて積極的に発信していきたい。								
								
「明治三十年度 社寺受託台帳」								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数（既存フィルム）	3,047件	5,373件	D		5,154	3,875	3,081	3,017
【年度計画に対する総合評価】 評価：A		【判定根拠、課題と対応】 定量的評価の目標値は前中期期間における既存カラーフィルムのデジタル化実績件数の平均値から算出しており、同フィルムのデジタル化は28年度で完了した。29年度よりモノクロフィルムのデジタル化件数を実績値としてあげており、単純に目標値との比較はできないが、29年度より上回る件数となり、順調に成果をあげている。						
【中期計画記載事項】 （略）収蔵品等の現状を確認の上、管理に必要なデータ（画像データ、テキストデータ等）を整備して、展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。なお、収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。								
【中期計画に対する評価】 評価：A		【判定根拠、課題と対応】 カラーフィルムのデジタル化が28年度で完了したことにより、当初の目標は達成されている。現在はモノクロフィルムのデジタル化を進めており、それを実績としているが、「デジタル化」の主流は既にデジタル撮影に移行して久しく、今後の指標としては、スキャニング作業だけでなくデジタル撮影の件数についても判定に加えていくことが相応しい。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信														
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 1) 有形文化財の管理 1/2														
【年度計画】 (4館共通) ア 収蔵等に必要な施設設備の充実、改善に向けた検討を行う。 イ 定期的に寄託品の所在確認作業を行う。															
担当部課	学芸部文化財課			事業責任者	課長 原田あゆみ										
【実績・成果】 ア ・施設設備に関しては収蔵庫10か所の扉の点検を行うとともに、非常時における収蔵庫の開閉について職員一同に周知を行った。 ・福岡市美術館の耐震補強改修を受け、28年12月から古美術品を中心とした約4,000点を当館にて保管し、展示活用してきたが、30年11月に無事返還が終了し、当該収蔵庫のモニタリング及び清掃を行った。 イ 年2回行う寄託品の継続手続きに合わせて、所在確認作業を実施した。また、開館当初の大量寄贈品である民族資料(金子コレクション)の保管方法について見直し、所在確認作業とあわせて中性箱による保管作業を行った。															
【補足事項】  福岡市美術館所蔵作品の保管状況 (担当者が最終確認をする様子)  福岡市美術館所蔵作品を当館から搬出している様子															
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29							
収蔵施設の収容率	80%	-	-	-	-	-	80%	85%							
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 福岡市美術館の作品の受入、保管、返還を無事終了した。それまで使用していた収蔵庫は、モニタリングと清掃を行い、特別展等で搬入された作品の保管場所として活用した。													
【中期計画記載事項】 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えるため、収蔵品等の管理を徹底し、特に収蔵品等の増加に伴い収蔵に必要な施設設備の充実、改善を図る。また、収蔵品等の現状を確認の上、(中略)展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。															
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 計画通り、所定の民族資料の所在確認と保管見直し作業を達成した。定期的な寄託品の所在確認を行うとともに、31年度以降計画している棚卸しのための準備作業を進めた。 31年度から収蔵品や長期借用品の棚卸しを3か年の期間で実施する。あわせて収蔵品データベースの拡充を図る予定である。													

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 1) 有形文化財の管理 2/2							
【年度計画】 (4館共通) ウ 収蔵品・寄託品等に関し、新規にデジタル撮影した画像等を蓄積し、それらに関する基本情報のデータ化及びデータ整備を引き続き推進する。 エ 文化財情報システム(業務システム)の運用を継続し、収蔵品データを更新する。 (九州国立博物館) ア 文化財情報(収蔵品データベース、寄託品・借用品データベース、陳列案管理データベース、画像データベース)の一元的管理が可能な業務システム構築を進める。								
担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長 原田あゆみ					
【実績・成果】 (4館共通) ウ 専任撮影技師による3,820件(カット)の収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データを整備した。 エ 文化財情報システムの運用を継続し、1,224件の収蔵品データを新規登録した。 (九州国立博物館) ア 列品・寄託品・借用品などの有形文化財情報と陳列・画像・修復などの情報を一元管理するシステムを継続的に運用し、また、同システムの改修・整備を進めた。								
【補足事項】 (4館共通)  大型平面資料の撮影風景  仏像の撮影風景  30年度納入の複写装置下部台 (九州国立博物館) ア 30年度は、これまで独立して管理していた修復情報を、業務システムへ統合し、同システム上で閲覧可能とした。これにより、有形文化財に関する情報へのアクセシビリティを飛躍的に向上させることができた。引き続き、基盤強化と情報統合の作業を進め、博物館活動を支援する体制の構築を目指す。								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年 変化	26	27	28	29
収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数(既存フィルム)	(完了)	一件	-		-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 新規のデジタル撮影を例年と同様に達成した。また「九州国立博物館文化財情報システム」の充実を図った。さらに、画像データベースの整備を進め、内外へ公開することで利便性を向上した。						
【中期計画記載事項】 (略) 収蔵品等の現状を確認の上、管理に必要なデータ(画像データ、テキストデータ等)を整備して、展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。(略)								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 計画通り、収蔵品等の情報を集中的に管理し、展示や調査研究に活用していくための核となるシステムを整備した。また、外部に文化財情報を発信し、博物館活動の活性化に供した。 31年度以降は30年度に収集した作品(独法九博：286件、福岡県アジア文化交流センター：184件)の新規撮影を進めるとともに、収蔵品全体の画像をポジフィルムに替えて高精細カメラにて再撮影する。30年度同様に2,000カット以上の撮影が見込まれており、専任技師による撮影が必要不可欠である。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信									
事業名	(1)有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 2)有形文化財の保存									
【年度計画】 (4館共通) ア 収蔵品等の生物被害等を防止するため IPM（総合的有害生物管理）の徹底を図る。 イ 収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。 (東京国立博物館) ア 本館収蔵庫の整備計画の根拠となる環境情報の収集、解析、評価を行う。 イ 収蔵品等の保存と展示に関する環境について全館的視野にたつて調査研究を進め、環境データの解析・蓄積を行う。 ウ 収蔵・展示施設における地震対策に関わる調査研究を行う。 エ 収蔵・展示施設の温湿度、空気汚染物質など保存環境に関する年次報告を整備する。 オ 輸送中の文化財に生じる振動及び衝撃に関する計測と調査を実施する。										
担当部課	学芸研究部保存修復課				事業責任者	課長 富坂賢				
【実績・成果】 (4館共通) ア 夏季に収蔵庫等72か所を対象に生物生息調査および害虫防除のための防虫薬剤設置を実施した。新規収蔵品に対して燻蒸を1回実施した。修理室1か所の除塵防黴処置を実施した。 イ 収蔵品を中心とした保存カルテを1,460件作成した。 (東京国立博物館) ア 本館収蔵庫の温湿度環境情報を収集し、それらの解析と評価から、収蔵環境の特性把握を行なった。 イ 収蔵庫及び展示室361か所の温湿度を計測し、11か所の空気汚染物質の濃度について計測を行い、データを蓄積した。 ウ 機構の異なる免震装置の性能を調査・比較した上で、常設展示に用いる免震装置付きの展示ケースを新規作製した。 エ 収蔵庫及び展示室246か所の温湿度、11か所の空気汚染物質に関する年次報告を整備した。 オ 文化財の貸借に伴う輸送中に生じた振動及び衝撃の計測を実施し、海外輸送時の5つの計測データを収集した。また、考古資料の館内輸送を想定した防振機能付き台車を試作した。										
【補足事項】										
【定量的評価】項目		30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29	
-		-	-	-	-	-	-	-	-	
【年度計画に対する総合評価】 評定：B			【判定根拠、課題と対応】 館内保存環境の現状把握のために、生物生息、温湿度、地震対策、空気環境、輸送中の振動に関する調査を実施した。解析によって改善点を導き出すために必要な情報量を獲得できた。							
【中期計画記載事項】 適切な展示・保存環境の保持のため、収蔵・展示施設の温湿度、生物生息、空気汚染及び地震等への対策、並びに保存等に関する調査研究とそのデータの解析・蓄積を引き続き実施する。										
【中期計画に対する評価】 評定：B			【判定根拠、課題と対応】 29年度に引き続き、文化財の保存・展示・輸送環境に関する調査研究は比較的順調に事業を実施できた。大規模災害に対する館全体の防災レベルに関しては、今後も重点的に事業を継続することで徐々に向上させていきたい。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1)有形文化財の収集・保管・次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 2)有形文化財の保存							
【年度計画】 (4館共通) ア 収蔵品等の生物被害等を防止するため、IPM（総合的有害生物管理）の徹底を図る。 イ 収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。 (京都国立博物館) ア 平成知新館の展示環境及び長期的な保存環境の維持管理に関わる調査研究を行う。 イ 明治古都館の改修計画に役立てるため、各種環境データの収集などを行う。 ウ フィルム保管庫、資料棟、文化財修理所、外部収蔵庫（KICK）も含めた、包括的な環境管理体制の構築を目指し、各種環境データの計測を継続する。								
担当部課	学芸部			事業責任者	列品管理室長 羽田聡 保存科学室長 降幡順子			
【実績・成果】 (4館共通) ア 館内外の保存科学担当者をはじめとする関係者との連携を強化し、IPMの徹底を図った。 イ 収蔵品の保存カルテを131件作成した。 (京都国立博物館) ア 平成知新館では専用LAN経由環境モニタリングシステムを構築し継続的な温湿度調査を実施している。また定期的に全館を網羅した昆虫類の生息調査、検知管による吸気環境調査を実施している。 イ 明治古都館では収蔵庫および限定的使用を実施した展示室について、温湿度調査（通年）、昆虫類生息調査を継続して実施した。また東収蔵庫は改修工事にともない、一時的にモニタリングを中止しているが、工事終了後に温湿度調査、精密清掃、昆虫類生息調査を再開する予定である。 ウ 各施設の温湿度データ、昆虫類生息調査、浮遊菌類調査等を実施し、外部収蔵庫（KICK）では現地管理者と毎月打ち合わせを実施するなど連携強化を図ることができた。またKICKの緊急対応として一時避難させた京都建仁寺塔頭両足院収蔵品は、31年3月に搬出され、本事案は終了した。								
【補足事項】 外部収蔵庫（KICK）の防災対応 (落下飛び出し防止ネット設置状態)								
								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
-	-	-	-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 貸与に伴う点検時を主体として行っている収蔵品の保存カルテを継続して行い、131件作成した。 展示・収蔵施設の温湿度環境モニタリング・昆虫類生息調査等の実施とそのデータ解析結果をもとに、包括的な環境管理体制の構築を目指し、各施設の施設整備関連部署との連携強化をより進めることができた。外部収蔵庫（KICK）では、年間と通して温湿度のモニタリング・昆虫類生息調査等を実施し、受け入れ文化財の適切な保管管理を実施した。今後は解析結果のフィードバックとその迅速な対応を実施するための体制をより強固にしていく必要があると考える。						
【中期計画記載事項】 適切な展示・保存環境の保持のため、収蔵・展示施設の温湿度、生物生息、空気汚染及び地震等への対策、並びに保存等に関する調査研究とそのデータの解析・蓄積を引き続き実施する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 適切な展示・保存環境の保持のための地震等への対策として、外部収蔵庫（KICK）では、棚内収蔵品の落下防止対策に一部着手することができた。展示・収蔵施設の温湿度管理は、所管7か所の建物内について通年モニタリングを実施しデータの蓄積を図るとともに、それらの解析結果を受けて、より適切な展示・保存環境の保持に向けて建物毎の対応策を検討することができた。今後も継続してモニタリング活動を進めるとともに、他館との情報交換などを実施し、より適切な環境保持に対する調査研究に繋げていきたい。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管・次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 2) 有形文化財の保存							
【年度計画】 (4館共通) ア 収蔵品等の生物被害等を防止するため、I P M (総合的有害生物管理) の徹底を図る。 イ 収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。 (奈良国立博物館) ア 展示施設及び展示ケースの温湿度管理について、無線LANによるデータ管理システムを更に充実させる。 イ 展示ケース内の温湿度・粉塵量などを継続的に計測し、ケースの調湿性能や気密性能の向上を図る。 ウ 収蔵・展示施設の適正な温湿度管理の徹底を図る。								
担当部課	学芸部			事業責任者	保存修理指導室長 鳥越俊行			
【実績・成果】 (4館共通) ア 館内における文化財害虫の生息状況を把握するため、文化財の保管および展示に関わる箇所を中心に昆虫調査用トラップを設置しモニタリングを実施した。トラップは約2か月に1度交換し、調査結果を蓄積するとともに傾向を分析することによりI P Mを推進した。文化財害虫の生息リスクのある古い展示ケースには防虫シートを設置し、収蔵場所のほこり対策には防塵マットを定期交換するなど、展示・収蔵環境の衛生保持に努めた。 イ 保存修理指導で作製した文化財の写真添付が可能な作製フォームを用いて、103件の保存カルテを作成・保管した。 (奈良国立博物館) ア 無線LANによるリアルタイム温湿度管理システムを運用し、正倉院展のような多数の観覧者がもたらす展示環境の変化について、監視並びに即時の対応を実施した。無線式温湿度センサーは展覧会の都度設置しており、展示終了後にはデータの分析を行い今後の参考資料とするとともに、蓄積した温湿度測定データを館内環境の改善に役立てた。 イ 展示ケース内の粉塵調査を正倉院展終了後の11月13日に実施した。また劣化した展示ケースのシール部分を交換・修理し、気密性の向上を図った。 ウ 展示室の無線LAN温湿度管理システムによる24時間モニタリングと展示室入口のエアカーテンを適切に運用することで館内温湿度負荷の低減を図り、年間を通じて安定した温湿度環境を維持した。								
【補足事項】 (4館共通) ア 館内の展示室・収蔵庫や文化財保存修理所等150か所に設置している文化財害虫調査用トラップを、学芸部研究員が当番制で2か月に1回設置・回収を行った。回収したトラップに捕獲された害虫の同定は外部業者に委託し、種類や捕獲数に関する情報の蓄積を行うとともに、害虫被害が懸念される箇所を中心に対策を実施した。併せて害虫発生を防ぐための清掃等による衛生環境の改善・保持などI P Mの実践につなげた。 (奈良国立博物館) ア 機械式自動調湿装置を内蔵した展示ケースを使用することで、多数の観覧者によるケース内の急激な温湿度変化を緩和し安定した展示環境を保つことができた。								
								
収蔵場所の入口に防塵マットを設置								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
-	-	-	-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 29年度に引き続き、当初の予定通りに温湿度の管理、文化財害虫への対策等が実施でき、文化財の管理・保存が図られた。必要に応じて展示ケースのシール部分の交換や修理等を進め、展示環境の向上を図った。						
【中期計画記載事項】 適切な展示・保存環境の保持のため、収蔵・展示施設の温湿度、生物生息、空気汚染及び地震等への対策、並びに保存等に関する調査研究とそのデータの解析・蓄積を引き続き実施する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 管理・保存のために、温湿度・生物生息等に対する計画的な対策を実施でき、中期計画は順調に進んでいる。31年度以降も展示・保存環境の把握に努め、適切に対応することにより文化財の維持・管理に努める。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(1)有形文化財の収集・保管・次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 2)有形文化財の保存								
【年度計画】 (4館共通) ア 収蔵品等の生物被害等を防止するため、IPM（総合的有害生物管理）の徹底を図る。 イ 収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。 (九州国立博物館) ア 館内の温湿度・空気質・生物生息など保存環境に関するデータを蓄積する。 イ 全館的視野に立った収蔵品等の展示・保存環境に係る調査研究を進め、環境データの蓄積・解析を行う。									
担当部課	学芸部博物館科学課			事業責任者	課長 木川りか				
【実績・成果】 (4館共通) ア 昆虫トラップ調査結果をもとに、徹底清掃などの方策を講じた。 イ 収蔵品及び修理完了資料を中心に保存カルテを101件作成した。 (九州国立博物館) ア 温度・湿度モニタリング機器を活用して展示室・収蔵庫の温度・湿度データを蓄積した。粘着シートによる昆虫トラップを収蔵庫、展示室、諸室等約440か所に設置し、2週間ごとに交換・観察した。この調査により、文化財害虫の進入経路等を速やかに把握でき、文化財害虫対策をより徹底して行うことができた。 イ 展示室や収蔵庫の周辺の機械室等における、文化財害虫の発生状況を確認した。文化財が置かれる場所の周辺環境を把握し、展示室や収蔵庫の環境保全に努めた。									
【補足事項】 ア ・展示ケース内に温度・湿度のデータロガーを個別に配置し、文化財に合わせた適切な温度・湿度管理をすることができた。年間1,000件を超える数多くの展示替えがあるが、データの管理、解析によって、展示環境を安全に管理することができた。 ・館内収蔵庫、展示室、諸室等に約440個の粘着トラップを設置・回収し、月ごとのモニタリング結果をもとに、速やかな防虫対策を講じることができた。また、これまで行ってきたように、害虫侵入箇所と館内の害虫の生息状況を早期に発見し、対処する体制を維持することができた。 ・地元のNPO法人（ミュージアムIPMサポートセンター）や市民ボランティアとの連携を進めた。市民ボランティアには、展示室など一般来館者エリアでのトラップ交換、NPO法人には、文化財を移動する導線の周辺エリアのメンテナンス、館内のトラップの観察など、環境保全に両者の協力を得た。 イ 文化財を置いている場所だけでなく、その周辺の機械室等の場所において、文化財害虫の発生が懸念されたため、隅々まで徹底清掃した。その後、通常の粘着トラップよりも面積の広い捕虫粘着シート（虫ペチャシート）を設置し、文化財害虫の発生状況を確認した。									
【定量的評価】項目		30年度実績	目標値	評価	経年 変化	26	27	28	29
殺虫殺菌処置		26件	－	－		9	12	58	35
保存カルテ作成件数		101件	－	－		75	91	81	102
【年度計画に対する総合評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 文化財が置かれている場所の温度・湿度データを常にしっかりと計測し、数多くの展示替えに合わせて、文化財の材質・状態に対し適切な展示環境を整備できた。また、展示室や収蔵庫の周辺における文化財害虫の発生状況を確認し、文化財が置かれる場所への侵入を防ぐよう努めた。						
【中期計画記載事項】 適切な展示・保存環境の保持のため、収蔵・展示施設の温湿度、生物生息、空気汚染及び地震等への対策、並びに保存等に関する調査研究とそのデータの解析・蓄積を引き続き実施する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 適切な展示・保存環境の保持のため、展示ケース・展示室・収蔵庫の温度・湿度をモニタリングし、適切な温度・湿度で展示・保管することができた。展示室・収蔵庫だけでなくその周辺エリアでの文化財害虫の生息状況をモニタリングし徹底清掃を行い、中期計画を順調に実施した。今後も30年度の手法をベースに館内の環境保全を進め、着実な取り組みを実施する。						



展示室周辺の機械室の徹底清掃の様子

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 3)有形文化財の修理 3)-1計画的な修理及びデータの蓄積								
【年度計画】 (東京国立博物館) ア 文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努めるとともに、劣化の著しい絵画、書跡、染織、考古の収蔵品を中心に緊急性の高いものから本格修理を実施する。特に 27 年度より実施している国宝「医心方」の修理に継続して取り組む。 イ 引き続き国宝・重要文化財の中長期的修理計画を策定する。 ウ 保存修復関係資料（前年度修理実施分）のデータベース化を図る。									
担当部課	学芸研究部保存修復課			事業責任者	課長 富坂賢				
【実績・成果】 (東京国立博物館) ア 保存修復課に彫刻や工芸品など立体の修理技術者および装こう関連修理技術者として書画の修理技術者の2人の修理技術アソシエイトフェローを配置し（うち立体担当1人は9月1日付で研究員として採用された）、館内で実施する館蔵品の応急(対症)修理を行なった。作品の劣化予防のために422件の応急修理を実施した。 イ 修理計画立案に向け、国宝・重要文化財を含む250件の作品に関して修理仕様の検討を行ない、中長期修理計画策定を進めて、26件の本格修理を実施した。 ウ データベース構築のために、29年度に修理が完了した43件の修理内容についてデジタル化を実施し、その成果をもとに『東京国立博物館文化財修理報告書XVIII』を刊行した。									
【補足事項】 ・ 国宝「医心方」（平安～江戸時代）独立行政法人国立文化財機構文化財保存活用基金により、修理を継続した。 ・ 国宝「国宝 埴輪挂甲武人」（土製 古墳時代・6世紀 群馬県太田市飯塚町出土）はバンク・オブ・アメリカからの寄附金により修理を実施した（29年3月着工、工期28か月）。									
【定量的評価】 項目		30年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	26	27	28	29
修理件数（本格修理）		26件	－	－		77	86	68	69
修理のデータベース化件数		98件	－	－		86	90	61	47
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 緊急性の高い本格修理及び対症修理、計画立案のための事前調査を計画的に実施した。運営交付金による修理費が伸び悩む中、寄附金の獲得に努め、国宝3件、重要文化財1件を含む修理を実施した。なお、本格修理の件数が減少しているのは、29年度からの継続事業に修理費をあてたこと、また考古資料相互貸借経費による修理が事業内容の見直しに伴いいったん休止したなどによるため、中期修理計画は予定通りに運用している。応急修理件数は29年度より増加しているが、これは貸与促進事業等に貸し出す作品の応急修理件数等が増えたことも要因である。							
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画に従い、事前調査、対症修理、本格修理の各段階で保存科学と修理技術が連携して保存修理事業にあたり、博物館活動に対して最適な作品修理を行うことができた。今後常駐する修理技術者を増員し、文化財の安全な活用を担保できる環境を整えたい。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 3) 有形文化財の修理 3)-1計画的な修理及びデータの蓄積							
【年度計画】 (京都国立博物館) ア 文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努めるとともに、緊急性の高いものから本格修理を実施する。 特に重要文化財「大手鑑（八十葉）」の修理に継続して取り組む。 イ 引き続き収蔵品の中長期的修理計画の策定を検討する。 ウ 修理資料のデータベース化を図る。								
担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長 羽田聡 保存修理指導室長 大原嘉豊					
【実績・成果】 (京都国立博物館) ア ・「廬山高図」等の応急修理を行い、劣化の予防に努めた。 ・28年度より4か年計画の3年目となる重要文化財「大手鑑（八十葉）」の修理を継続して行った。 イ 収蔵品の中長期的修理計画の策定の検討を行った。 ウ ・30年度は149件の新規修理文化財搬入がありデータベース化を行うとともに、過去のデータに関して1,972回追加、更新を行った。 ・保存修理所創設以来の非電子化修理報告のPDF化に着手し、30年度は119件の修理記録のPDF化を行った。								
【補足事項】 ア 緊急性の高い作品を優先に、17件の本格修理を行った。 (絵画5件、書跡3件、金工5件、漆工1件、染織2件、考古1件)								
重要文化財「大手鑑（八十葉）」修理風景								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
修理件数（本格修理）	17件	-	-		11	12	14	11
修理のデータベース化件数	149件	-	-		113	113	151	180
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 30年度も多分野にわたって、緊急性の高い収蔵品から計画的に修理を行うことができた。また、4か年事業の重要文化財「大手鑑（八十葉）」の修理についても順調に継続修理がなされている。 金工修理作品のうち「槍 銘△長谷部国信」、「刀 銘立命館義一作／乙酉年二月日」は、修理完了後に30年度特別展「京のかたな」にて公開した。						
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。								
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 30年度も多分野にわたり、列品管理室、保存修理指導室、保存科学室、各担当者が連携し、緊急度の高い作品から順に修理を行い、修理業者とも相談しながら、順調に成果を上げることができた。						

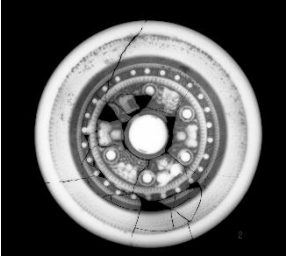
中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 3) 有形文化財の修理 3)-1 計画的な修理及びデータの蓄積								
【年度計画】 (奈良国立博物館) ア 文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努めるとともに、劣化の著しい彫刻、絵画、書跡、漆工や考古の収蔵品を中心に緊急性の高いものから本格修理を実施する。特に重要文化財「絹本着色親鸞聖人像」等の修理に取り組む。 イ 引き続き収蔵品の中長期的修理計画を策定する。 ウ 修理資料のデータベース化を図る。 エ 寄託の継続を図る必要性の高い寄託品について修理を実施する。									
担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長 鳥越俊行						
【実績・成果】 (奈良国立博物館) ア ・館蔵品本格修理6件のうち、新規4件、28年度からの継続事業1件、29年度からの継続事業1件を実施した。 内訳 絵画3件 彫刻1件 書跡1件 考古1件 ・年度内に5件が完了した。 イ 22年度に策定した館蔵品の長期修理計画に基づき、館蔵品修理を計画通りに実施した。 ウ 『文化財保存修理所修理報告書』の刊行に向け準備を進め、修理報告資料を整理しデータベース化に努めた。 エ 寄託所蔵者と協議を行い、寄託品3件について当館の推薦による財団からの助成を受けて修理を実施した。									
【補足事項】 (奈良国立博物館) ア ・収蔵品の修理を目的とした募金箱について、従来の設置場所以外に特集展示「新たに修理された文化財」の期間中、展示会場に設置した。 ・寄託品修理として、新規に法隆寺所蔵 木造釈迦如来坐像と元興寺町共和会所蔵 木造大日如来坐像の2件着工し、唐招提寺所蔵 絹本着色行基菩薩像は30年度末に修理が完了した。京都・聖護院所蔵 絹本着色役行者八大童子像は住友財団の助成により29年度から2か年継続で修理を行っており30年度末に修理が完了した。奈良・達磨寺所蔵 絹本着色玄奘三蔵十六善神像と奈良・談山神社所蔵 金沃懸地平文太刀は出光文化福祉財団の助成により30年度末に修理が完了した。									
									
特集展示「新たに修理された文化財」期間中に設置された募金箱									
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年 変化	26	27	28	29	
修理件数（本格修理）	6件	—	—		9	11	7	6	
修理のデータベース化件数	63件	—	—		77	66	62	69	
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 28年度及び29年度から実施している継続事業による修理のほか、新規事業による修理にも着工でき、計画的に修理が実施できている。また、本格修理及びデータベース化の件数は、概ね予定通り進行した。							
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 財団助成や寄附金、募金等を活用し、緊急性の高いものから順次修理を実施することができた。また、当館保存担当研究員と文化財保存修理所の修理技術者が連携し、X線CTやX線透過撮影、蛍光X線分析などを実施することで、適切な修理の基礎資料とした。中期計画は順調に進んでいる。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 3) 有形文化財の修理 3)-1計画的な修理及びデータの蓄積							
【年度計画】 (九州国立博物館) ア 文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努めるとともに、緊急性の高いものから本格修理を実施する。特に重要文化財「対馬宗家関係資料」等の修理に継続して取り組む。								
担当部課	学芸部博物館科学課							
事業責任者	課長(兼環境保全室長) 木川りか							
【実績・成果】 (九州国立博物館) ア ・館蔵品を中心に、損傷状況や展示計画等を勘案し、緊急性の高い文化財41件(本格40件、応急1件)の修理を実施した。 ・当館文化財保存修復施設使用者等の協力を得て、館蔵品、寄託品、九州所在の地方公共団体・社寺等所蔵品の保存状態調査を行うことができたため、効率的な調査の実施と現実的な修理計画の策定、適切な処置へとつなげることができた。								
【補足事項】 ・館費による修理件数41件(本格40件、応急1件)の内訳： 絵画4件(本格4件)、書跡2件(本格1件、応急1件)、金工24件(本格24件)、刀剣1件(本格1件)、陶磁2件(本格2件)、染織1件(本格1件)、考古1件(本格1件)、歴史資料6件(本格6件) ・重要文化財「対馬宗家関係資料のうち箱19巻1～7」(当館所蔵)は、鉄媒染で染色されたと考えられる表紙裂が使用されており、酸化により強度が著しく低下し、取り扱いが困難な上、美観を損ねていた。当館文化財保存修復施設で修理が実施されたことにより、修理の進行状況の頻繁な確認と協議を行うことができ、安定性の高い化学染料を用いて同色・同模様の表紙裂を新調した。修理は2か年計画(31年度まで)で継続中である。 ・当館文化財保存修復施設使用者の協力を得て、福岡・千眼寺の本尊、釈迦如来坐像ほかの保存状態調査を行った。 ・29年度に一括寄贈を受けた茶釜 211 口(当館所蔵)について、緊急性の高い 24 口の修理を行った。特に、茶釜の修理は当館では初めての事例であったため、実体顕微鏡観察等による事前調査を行い、修理方針・修理方法について充分協議した上で修理を実施した。修理後、一部の作品を特集展示「坂本五郎コレクション 受贈記念 北斎と鍋島、そして」において公開した。								
 重要文化財「対馬宗家関係資料のうち箱19巻1～7」の表紙裂の修理前(上)と修理後(下)								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
修理件数(本格修理)	40件	-	-	-	23	22	18	19
修理のデータベース化件数	-	-	-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 当館文化財保存修復施設使用者等の協力を得て、保存状態調査を行っただけでなく、重要文化財「対馬宗家関係資料」を含む40件の本格修理を計画的に実施することができた。また、修理後は当館で展示活用を図ることで、修理の成果を一般に公開することができた。						
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿い、機構内外の研究員や修復技術者と連携し、伝統技術に科学技術を取り入れながら計画的に修理を実施できた。調査研究設備については、正確で安定した分析値を取得できるよう、保守を行った。今後も、緊急性が高い作品から本格修理を実施し、継続的に修理を行うとともに、修理を終えた作品は展示に活用し、広く公開していきたい。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信									
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 3) 有形文化財の修理 3)-2科学的な技術を取り入れた修理									
【年度計画】 (4館共通) ア 紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 イ 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、X線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。										
担当部課	学芸研究部保存修復課			事業責任者	課長 富坂賢					
【実績・成果】 (4館共通) ア 修理前作品 TJ-4834-11「河口慧海蒐集遺品」からの検体（本紙、補紙）など2件の紙質検査を行って修理方針を決めた。 イ C-439「神鹿」、J-36697「埴輪 挂甲の武人」など105件（654箇所）の蛍光X線分析による材質の調査を行い材質調査、修理方針の決定などに寄与した。透過X線撮影はA-12101「葡萄図」の軸に仕込んである鉛の確認、特別展「顔真卿」展では八双の状態調査を展示前に行い、その後の作業の参照とした。 X線関連以外ではN-4「文王呂尚図」の赤外線撮影調査を行い、劣化状況の確認と材料、描画技術の調査研究を行った。										
【補足事項】										
										
所蔵仏画のX線撮影の様子			X線を用いた展示前状態調査の様子			蛍光X線分析による技法材料調査の様子				
【定量的評価】項目	30年度実績		目標値		評価	経年変化	26	27	28	29
-	-		-		-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 所蔵作品の修理前中にしか行えない調査や所蔵品調査、展示前に行う作品の状態を成果を上げている。当館の装置では大きさなどで対応できない文化財もあり、今後は可搬型装置や固定支持具の改良を行ってより多くの作品の調査に寄与できるようにする。							
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。										
【中期計画に対する評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 現在保有している機器の性能を活かした特殊撮影や調査分析、機構内の保存科学研究員と共同した調査研究は目標水準を達しているものとする。また、機構内外の修復技術担当者と連携した修理前、修理中における調査分析についても目的を達成できている。今後は、現在使用している機器では捉え切れていない「有機質材質の特定」「濃度測定」を行える測定機器を計画的に導入し、また木材の調査においては機構内外の他分野の職員と連携して解析精度を上げていくことが必要である。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信									
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管・次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 3) 有形文化財の修理 3)-2科学的な技術を取り入れた修理									
【年度計画】 (東京国立博物館) ア X線CTスキャナを運用し、研究の進展を図り、より適切な修理方法を引き続き検討する。										
担当部課	学芸研究部保存修復課			事業責任者	課長 富坂賢					
【実績・成果】 (東京国立博物館) ア 大型垂直X線CTスキャナではC-20菩薩立像など67件(列品56件、特別展関連1件、外部依頼10件)。大型水平X線CTスキャナではTE-801ナーガなど24件(列品10件、特別展関連4件、外部依頼10件)。微小部X線CTスキャナではC-1818酔胡従など72件(列品42件、特別展関連3件、外部依頼27件)の撮影を行い、修理前、修理中の状態調査ほか、作品の技法などの調査研究を行った。特別展関連(縄文展)では安全な移動梱包作業に向けて担当者とCT画像を見ながら固定する場所などの確認を行った後に輸送梱包を行い、無事に作品を輸送した。										
【補足事項】										
										
図左、中：修理前X線CT調査の様子			図右：縄文展 輸送前X線CT調査の様子							
【定量的評価】項目	30年度実績		目標値		評価	経年変化	26	27	28	29
-	-		-		-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 調査件数の実績、並びに国内様々の他機関との連携などに活用できたことは十分に評価できる。30年度は29年度に比して特別展関連のX線CT撮影調査は減少したが、本来的な活用方法である所蔵品の修理事業や調査研究が進んだ。							
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。										
【中期計画に対する評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 X線撮影調査は作品の安全を第一に運用していることから、件数の推移は順調といえる。29年度は特別展関連の作品の撮影が多かったことによる収蔵品の調査が少なかったことを改善し、30年度は中長期的な修理計画に向けた撮影件数が伸びた。今後も特別展、通常業務のバランスを取って撮影を行っていく。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 3) 有形文化財の修理 3)-2科学的な技術を取り入れた修理							
【年度計画】 (4館共通) ア 紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 イ 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、X線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 (京都国立博物館) ア 修理作品に関する材質・構造調査を、X線CT撮像、蛍光X線分析等の非破壊的な手法を用いて実施し、より安全な修理計画立案に資する情報を修理者等と共有する。								
担当部課	学芸部			事業責任者	保存科学室長 降幡順子			
【実績・成果】 (4館共通) ア 博物館と模写修理事業者（六法美術）とによって、当館館蔵若狭国鎮守神人絵系図の復元模写を5か年計画で実施しており、30年度は2か年目である。高精細画像を用いた上げ写しを継続しておこなっている。7月に原本の料紙の調査をおこない、それをもとに料紙の作成・加工を進めている。 イ 30年度、所蔵者の協力を得て文化財修理所内工房と実施した科学分析調査は、作品の内部構造調査として、I.Pを用いたX線透過撮影13回、X線CT撮像3件を実施した。作品の材質調査としては蛍光X線分析調査23件、微細構造調査としてはデジタルマイクロスコープ撮影1件である。 (京都国立博物館) ア 修理所工房からの依頼による調査として、絹本・紙本の絵画資料の彩色材料調査を実施している。修理中に想定される彩色材料へ与える影響を最も少なくするため、彩色材料の種類に関する情報を修理技術者と分析調査を通じてその場で共有できることは、修理の安全性に対して有用であるといえる。また彫刻や埋納物調査ではX線CT撮影を修理技術者とともに実施することにより、内部構造等を迅速に検討し、修理方針の立案に貢献することが可能となっている。								
【補足事項】								
 国宝「大手鑑」の調査								
【定量的評価】 項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
-	-	-	-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 30年度は、若狭国鎮守神人絵系図修理事業の2か年目として実施することとなった。また、従来から実施している展示前状態調査や文化財修理所各工房からの修理前・後調査依頼を受け入れ、透過X線撮影、X線CT撮像、顕微鏡観察、蛍光X線分析等の共同調査をおこなった。修理前調査では、文化財の構造調査、材料調査を実施し多くの情報を修復技術担当者とは共有することができ、修理方針の策定などに役立てた。今後も継続を図りたい。						
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 修理事業者を含めて綿密な調査、検討を重ね、文化財の保存と公開のため、参考となる情報を蓄積するなど、有形文化財に関連する調査研究について順調に成果を上げている。27年に始めた復元模写事業は研究や一般啓蒙上の効果が高いため継続事業化を進めており、当館蔵「若狭国鎮守神人絵系図」の一部の復元模写を実施している。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 3) 有形文化財の修理 3)-2科学的な技術を取り入れた修理							
【年度計画】 (4館共通) ア 紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 イ 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、X線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 (奈良国立博物館) ア 木造文化財について、木材樹種同定の調査を行い、文化財の材料の解明及び修理指針の検討に役立てる。 イ 古墳出土の甲冑片、武具等鉄製品、木造彫刻などのX線撮影及び実測図作成を順次進め、材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。								
担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長 鳥越俊行					
【実績・成果】 (4館共通) ア 紙文化財の修理を行っている当館文化財保存修理所の文化財保存と共同で修理文化財の紙質調査を行い、修理方針の検討資料とした。 イ 館蔵品や寄託品の修理の際に、当館が保有する光学機器を用い、当館研究員と文化財保存修理所工房職員が共同で赤外線撮影や蛍光X線分析、X線CT等を実施するとともに、修理方針の検討資料とした。 ・絵画作品の修理の際に、詳細な観察を行うため赤外線撮影を実施した。(実施計7回) ・修理方針に反映させるため、絵画作品の蛍光X線分析を実施した。(実施計1回) ・彫刻や工芸作品の修理について、内部構造を調査するためX線CTを実施した。(実施計4回) (奈良国立博物館) ア 文化財保存修理所で修理を行った木造彫刻作品について、29年度に引き続き京都大学生存圏研究所と連携し樹種同定調査を行った。同定結果は修理に活用している。(実施計3件) イ 古墳出土の鉄器を中心とする館蔵考古資料の修理に際し、X線撮影等による構造調査などを行い、製作技術の解明や修理方針の検討資料とした。(実施計1回)								
【補足事項】 (4館共通) イ 当館の館蔵品や寄託品の修理に際して、文化財保存修理所の各工房と当館研究員が共同で文化財調査を実施し、データの収集・共有化に努めた。これらの調査を円滑に実行するため、当館に設置されている光学機器(高精細デジタルカメラ、近赤外線カメラ、蛍光X線分析装置、X線透過撮影装置、X線CT装置など)を積極的に利用し活用を図った。								
								
修理前の鏡のX線写真								
【定量的評価】 項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
-	-	-	-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 彫刻作品の修理中にX線透過撮影やX線CTを実施し、適切な修理に役立てるとともに、修理の基礎資料とした。このほか29年度に引き続き京都大学と連携して樹種同定調査を行うなど、16回の調査を実施し、修理所との連携を進めている。今後必要に応じ調査を実施することで、よりよい修理のためのデータ取得と活用を図る。						
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 保存科学担当者と修理技術者が、修理前や修理中の文化財に対して繊維同定や樹種同定などの科学分析を行うことで、適切な修理のための基礎資料とするとともに、その成果をふまえて計画的な修理を実施した。X線CT装置を構造調査や修理に活用することにより、文化財の修理指針の検討に役立てた。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 3) 有形文化財の修理 3)-2科学的な技術を取り入れた修理							
【年度計画】 (4館共通) ア 紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 イ 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、X線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。 (九州国立博物館) ア 修理作品の状態を、実態顕微鏡観察を基本としてX線スキャナ、X線透過撮影等の各種光学的調査も駆使して正確に判定し、修理指針の策定に資する。								
担当部課	学芸部博物館科学課			事業責任者	課長 木川りか			
【実績・成果】 (4館共通) ア 29年度に引き続き、重要文化財「対馬宗家関係資料」(当館所蔵)等の紙本文化財の繊維同定を行い、文化財ごとに適切な補修紙を作成した。 イ ・「花鳥図巻」(当館所蔵)の過去の修理に用いられた接着剤について、実体顕微鏡観察および赤外分光分析を行い、酢酸ビニール系の接着剤が使用されていることを明らかにし、修理手法の検討に役立てた。 ・31年度に修理予定の「霰真形釜」(当館所蔵)等について、X線CTスキャナにより、損傷状態の調査を行った。 (九州国立博物館) ア 国宝「婚礼調度類〈徳川光友夫人千代姫所用〉のうち書棚」(徳川美術館所蔵)のX線CTスキャン及びX線透過撮影、及び重要文化財「木造東陵永興禅師倚像」(熊本・雲巖禅寺所蔵)、黒漆山水楼閣葡萄沈金中央卓(浦添市美術館所蔵)などのX線CTスキャンを実施し、修理に必要な構造調査を行った。								
【補足事項】 ・修復施設1・2・3では、修理工房宰匠が館費修理品8件のほか、国宝「琉球国王尚家関係資料」文書記録類(那覇市所蔵)など、合計37件の修理を実施した。 ・修復施設4(～9月)では、国宝修理装演師連盟が重要文化財「細川家舟屋形天井画」(永青文庫所蔵)1件の修理を実施した。 ・修復施設4(10月～)では、美術院が重要文化財「木造十一面観音立像」(福岡・普門院所蔵)など、合計3件の修理を実施した。 ・修復施設5では、芸匠が館費修理品3件のほか、重要文化財「広田遺跡出土品のうち貝製品」(鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵)など、合計4件の修理を実施した。 ・修復施設6では、大西漆芸修復スタジオが国宝「婚礼調度類〈徳川光友夫人千代姫所用〉のうち書棚」(徳川美術館所蔵)など、合計4件の修理を実施した。 ・当館所蔵品の館外修理は、岡墨光堂が重要美術品「星曼荼羅」など5件、小宮光敏が「脇差」1件、八木鍔金が重要美術品「梅竹の図真形釜」など24件、合計30件を実施した。								
								
「梅竹の図真形釜」(当館所蔵)の修理協議の様子								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
-	-	-	-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 当館修復施設を九州等所在文化財49件の修理に活用した。また、伝統的な紙や近時修理の接着剤の材質分析等を行い、修理方針を検討することができた。伝統的な修理に科学調査の結果を取り入れ、適切な修理を実施することができた。						
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 当館所蔵品については、修復施設使用者と連携しながら作品の状態調査を行い、当館以外の九州所在文化財については、修復施設使用者、所蔵者、管内教育委員会等と連携し、適切な修理計画を策定することができた。修理着手前には、X線CTによる構造調査、修理中には紙繊維の同定、接着剤の分析等の科学調査を行い、伝統技術に科学技術を取り入れた修理を計画的に実施できた。 新しい科学技術を取り入れる等により、31年度以降も文化財の状態調査を行い修理指針の策定に役立てるだけでなく、文化財の材料・技術の解明に資したい。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 4) 文化財修理施設等の運営							
【年度計画】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) ア 文化財保存修理所等の整備・充実に向けた検討を行う。 (京都国立博物館) ア 文化財保存修理所の設備等の改修について引き続き国と協力して検討を行う。 イ 文化財保存修理所及び仮工房等の施設を計画的に運用し、文化財の積極的な保存修理を図る。								
担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長 数馬厚人 保存修理指導室長 大原嘉豊					
【実績・成果】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) ア 文化財保存修理所の整備・充実のため、定期的に工房との修理者協議会を開催した。 (京都国立博物館) ア 文化財保存修理所運営委員会を開催し、文化財保存修理所の運用について審議した。 イ ・経年により老朽化した雨水配管について、内部にライニング加工を施し、配管を強化するとともに耐久年数を向上させた。 ・経年により老朽化した天井クレーンについて、更新を行うべく仕様を決定し発注を行った。 ・雨水排水管等の老朽諸設備の改善を行った。 ・既存消防設備に加え、各工房に二酸化炭素消火器を任意設置した。 ・防災体制の充実ははかるため、文化財保存修理所での防災訓練を実施した。								
【補足事項】 ・30年度夏季は関西地区に風水害が連続したことにより、設備の老朽化による不具合が顕在化し、その対策に追われた。								
		 文化財保存修理所運営委員会						
【定量的評価】 項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
-	-	-	-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 文化財保存修理所運営委員会及び修理者協議会を予定通り開催した。 老朽設備の改善を適時適切に行った。文化財保存修理所において、文化財の適切な保存修理環境を維持するため、雨水排水管の再生工事を完了し、また修理の際使用する天井クレーンについて更新を行うべく仕様の決定及び発注を行う等、設備等の改修を実施できた。						
【中期計画記載事項】 文化財保存修理所等については、文化財防災も視野に入れながら、国と協力して整備充実に図る。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 国や工房と協力しながら文化財保存修理所の整備を進めており、雨水排水管再生工事や天井クレーン更新等設備の整備充実に実施できた。 設備面での老朽化は目立つものの、足りない部分を防災訓練や新たに二酸化炭素消火器を設置など、色々な方法で補うように努力を続けている。今後も中期計画の達成に向けて引き続き、整備・充実を進めていく。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 4) 文化財修理施設等の運営							
【年度計画】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) ア 文化財保存修理所等の整備・充実に向けた検討を行う。 (奈良国立博物館) ア 文化財保存修理所を円滑に運用して、文化財の積極的な保存修理を図る。								
担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長 鳥越俊行					
【実績・成果】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) ア 文化財保存修理所のブラインドが故障したため、部品交換を実施した。また、空調機が劣化してきたため、予防保全の観点から部品を交換した。 (奈良国立博物館) ア 文化財保存修理所運営委員会を6月4日に開催し、修理所の円滑な運用に努めた。修理に従事する公益財団法人美術院、株式会社文化財保存、北村工房の3工房代表者と当館学芸部で文化財保存修理所協議会を開催(1回目は9月10日に開催、2回目は31年2月28日に開催)。各工房における修理事業の実施状況、修理所施設の維持・管理、工房内の温湿度をはじめとする保存環境の改善に関する課題などを討議した。 ・館長以下博物館職員が定期的に文化財保存修理所各工房の修理実施状況を視察する修理所巡回を3回実施した。								
【補足事項】 ・12月26日から31年1月20日まで、当館西新館北第1室において特集陳列「新たに修理された文化財」を開催し、29年度に文化財保存修理所各工房などで修理が完了した当館収蔵品・寄託品を修理解説パネルとともに展示(9件)することで、文化財修理技術を広く一般に理解してもらう機会とした。 ・文化財保存修理所の施設や事業の概要を紹介する案内パンフレットを、修理所公開や国内外の修理専門技術者による修理所視察などの機会に配布した。 ・31年1月10日に文化財保存修理所一般公開を開催し、修理の取り組みや修理所各工房の活動を広く知ってもらう機会とした。								
 特集展示「新たに修理された文化財」の様子								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
-	-	-	-	-	-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 運営委員会及び所内3工房代表者との協議会を開催し、修理の実施状況の確認及び保存環境の改善について協議するなど、情報の共有に努め、文化財保存修理所を円滑に運営することができた。						
【中期計画記載事項】 文化財保存修理所等については、文化財防災も視野に入れながら、国と協力して整備充実を図る。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 文化財保存修理所を円滑に運用するとともに、X線CTによる修理への応用や文化財被災時に修理技術者と連携できるように意見交換を行った。その成果を踏まえた文化財に対する積極的な保存修理を実施することができ、中期計画は順調に進んでいる。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ③有形文化財の管理・保存・修理等 4) 文化財修復施設等の運営
【年度計画】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) ア 文化財保存修理所等の整備・充実に向けた検討を行う。 (九州国立博物館) ア 文化財保存修復施設及び調査分析室を運営し、文化財の保存修理に積極的に活用する。	
担当部課	学芸部博物館科学課
事業責任者	課長 木川りか
【実績・成果】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) ア ・文化財保存修復施設1の書跡や歴史資料の修理に使用する補修紙や吸水紙を乾燥するための紙干棚について、修復技術者の使いやすさや、バックヤードツアー見学者の視界を妨げることがないよう、天井を利用した可動式の棚を設計し、設置した。 (九州国立博物館) ア ・当館文化財保存修復施設にて当館経費による修理11件及び所有者負担による修理38件、合計49件の修理事業を実施した。その他、館外で当館経費による30件の修理事業を実施した。 ・保存修復諸室を活用し、当館所蔵品及び寄託・借用品等12件の構造調査等を行い、その結果を保存管理に役立てた。	
【補足事項】 文化財保存修復施設1の紙干棚については、書跡や歴史資料の修理案件が増加しており、修理に使用する補修紙や吸取紙の乾燥場所の確保が課題となっていた。29年度は、天井に吊り下げて昇降できる可動式の棚を設計し、30年度に施工した。作業時は人の手の届くところまで下ろし、乾燥中は天井近くまで上げることにより、修復技術者と修復施設見学者双方の利便性を確保できた。	
	
文化財保存修復施設 1 に新設した紙干棚	
【定量的評価】 項目	30年度実績
-	-
目標値	-
評価	-
経年変化	26 27 28 29
-	- - - -
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 文化財保存修復施設内に昇降可動式紙干棚を新設したことで、修復技術者と見学者の利便性を両立できた。 修理事業や分析調査事業については、当館所蔵品だけでなく、九州所在の教育委員会・社寺等所蔵品に対しても実施しており、九州の文化財修理・調査の拠点として活動できた。
【中期計画記載事項】	
文化財保存修理所等については、文化財防災も視野に入れながら、国と協力して整備充実を図る。	
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に対し順調に成果をあげることができた。特に限られたスペースを有効に活用できる設備を導入することで、バックヤードツアー見学者の視界を妨げることなく、より多くの作品を効率的に修理することが可能となった。開館より10年以上がたち、経年劣化や修理件数の増加により、修理やメンテナンスが必要な設備が増えてきている。当該設備のメンテナンスを継続的に行い、文化財を適切に修理・分析できる設備を整備していきたい。